

日本結核病学会東海支部学会

—— 第119回総会演説抄録 ——

平成24年6月23・24日 於 名古屋市中心企業振興会館（吹上ホール）（名古屋市）

（第101回日本呼吸器学会東海地方学会と合同開催）

会 長 齋 藤 博（愛知県がんセンター愛知病院）

—— 一 般 演 題 ——

1. 外側胸動脈肺静脈瘻の1例 °藤田陽奈・大久保仁嗣・土方寿聡・上村剛大・國井英治・小笹裕晃・高桑修・宮崎幹規・前野 健・小栗鉄也・中村 敦・佐藤滋樹・新実彰男（名古屋市立大学病呼吸器内）

症例は75歳女性。1993年に人工弁を用いた大動脈弁置換術を受けワーファリン内服中。2011年10月下旬、大量咯血のため緊急入院。胸部X線で右中肺野に浸潤影、CTで中葉に樹状・斑状病変とスリガラス濃度域を認めた。3D CT angiographyで右気管支動脈の軽度拡張、また胸壁の外側胸動脈の拡張があった。保存的治療で咯血は終息し抗凝固療法の再開を試みたところ再度咯血があり、動脈塞栓術の適応と考え血管造影を施行。右鎖骨下動脈、右外側胸動脈、中葉の異常血管、肺静脈の順に血流があり、右外側胸動脈肺静脈瘻と診断し塞栓術を施行した。以後ワーファリンを再開し咯血はない。報告症例の少ない本症に動脈塞栓術が有効であったので報告する。

2. 肝結核治療後に両肺野の消長する陰影を認め、最終的に肺サルコイドーシスが疑われた1例 °浅野俊明・熊澤宏美・林 信行・日比野佳孝・山田祥之（JA愛知厚生連江南厚生病呼吸器内）佐々木洋治（同消化器内）福山隆一（同病理診断）

症例は54歳女性。2006年に近医で肝臓・脾臓に多発する腫瘤を指摘。肝生検で結核と診断して、抗結核治療を施行。肝臓・脾臓の陰影は消失したが、2009年に右中葉に結節を指摘。臨床経過から結核再燃を疑い、再度抗結核治療を施行した。その後、両肺野に陰影の消長を繰り返したため、気管支鏡検査を再検。サルコイド様肉芽腫を認め、気管支肺胞洗浄液ではCD4/8比が高値を示した。Gaシンチでは両側涙腺・耳下腺・縦隔に集積を指摘。臨床経過から肺サルコイドーシスと考えられた。参考文献を交えて考察する。

3. 両肺野多発浸潤影と右副腎腫大を認め、当初肺癌を疑った肺結核の1例 °熊澤宏美・林 信行・日比

野佳孝・浅野俊明・山田祥之（JA愛知厚生連江南厚生病呼吸器内）福山隆一（同病理診断）高木達矢・齋藤裕子・松本政実（一宮市立市民病呼吸器内感染症）
症例は75歳女性。主訴は発熱と咳。来院2カ月前から咳が時々出現。来院当日、外出先で気分不快感と熱感を自覚して救急要請。当院到着時37.8℃の発熱があり、採血では白血球15900、CRP 3.61、血糖388、HbA1c 13.6と炎症所見および高血糖を指摘。胸腹部CTでは右下葉に腫瘤影、両肺野に多発結節影、右副腎腫大を認めた。肺癌を疑い、全身検索を予定したが、入院時の喀痰検査でガフキー3号、結核PCR陽性と判明。肺結核と診断して、他院で転院加療する方針となった。参考文献を交えて考察する。

4. 当院にて経験した胸囲結核の8例 °戸田有紀・鮎稔隆・浅野幸市・大西涼子・小林瑞穂・安田成雄・佐野公泰・加藤達雄（NHO長良医療センター呼吸器内）

当院では2001年～2012年に8例の胸囲結核を経験した。8例中7例で膿瘍穿刺にて診断（TB-PCR陽性5例、病理診断2例。全例培養は陰性であった）、1例は画像診断した。全例に化学療法を行い、4例に治癒を認めた。そのうち3例は化学療法のみで、1例で郭清術を併用した。

5. Xpert MTB/RIFの使用経験 °中川 拓・長谷川万里子・林 悠太・垂水 修・山田憲隆・小川賢二（NHO東名古屋病）

多剤耐性結核は世界で50万例以上の患者がいるといわれており、結核対策の大きな課題となっている。現在の薬剤感受性試験は4週間以上時間がかかるために、その間不適切な治療がなされたり、さらに感染の拡大を招くおそれがあることが世界的に問題とされており、薬剤耐性の迅速な診断が求められている。近年、Xpert MTB/RIFという、喀痰から直接全自動で結核菌遺伝子とRFP耐性遺伝子を増幅して2時間以内に検出する検査機器の

有用性が報告されており (NEJM 2010 ; 363 : 1005), 全世界で発売されている。今回われわれは試験的に Xpert MTB/RIFを使用する機会を得たのでその使用経験を紹介する。

6. 肺 MAC 症の感染源・感染経路・病態に関する臨床および菌遺伝子研究—宿主因子を中心とした検討

°多賀 収・中村さつき・関 剛・伊藤雄二 (総合大雄会病呼吸器内) 中川 拓・小川賢二 (NHO 東名古屋病臨床研究・呼吸器)

MACは環境からヒトに感染すると考えられているが、しかし肺 MAC 症の感染源・感染経路に関し十分に解明されていないのが現状である。また MAC 菌の遺伝子タイプの違いによる病勢予測や治療反応性についても検討が急がれる状況にある。以上を踏まえ、現在われわれは肺 MAC 症患者における宿主因子 (患者背景など) と菌側因子 (喀痰および患者の自宅浴室から得られた MAC 菌株の VNTR 法を用いた遺伝子的解析) の双方の要因を調査し、肺 MAC 症の感染源・感染経路が浴室であるかを解明すること、および患者喀痰から分離された MAC 菌の遺伝子挿入配列の特徴などから病勢や治療反応性の予測をすることを目的に研究を行っている。研究開始から 6 カ月経過し、研究に参加した肺 MAC 症患者 13 例 (女性 8 例, 平均年齢 71.5 歳) のうち 7 例の患者自宅浴室から MAC 菌が検出され、現在遺伝子的解析を施

行中である。今回は肺 MAC 症患者の宿主因子を中心に、研究の途中経過を報告したい。

7. 術前 3 年、術後 3 年観察した *Mycobacterium avium* 肺感染症の 1 例 °勾坂伸也・右藤智啓・佐藤 潤・妹川史朗・安田和雅 (磐田市立病呼吸器内) 須田隆文・千田金吾 (浜松医大第二内)

症例は 60 代女性。右上葉に局限した空洞陰影を認め、3 年間にわたり多剤併用療法を実施したが空洞陰影の悪化、持続する大量排菌、他肺葉への散布影の出現を認め右上葉切除を実施した。術後は画像的増悪、排菌を認めず経過し、術後 9 カ月で多剤併用療法を中止した後も悪化なく経過した。外科的治療の効果を認識したものの、手術時期について考慮するうえで興味深い 1 例であった。

8. 当院における呼吸器疾患を対象とした可溶性メソテリン関連ペプチド (SMRP) 測定について °森

秀法・神谷文彦・阿部博彦 (羽島市民病呼吸器内)

血清 SMRP は中皮細胞に発現するメソテリンの可溶成分であり、悪性中皮腫補助診断への有用性が報告されている。呼吸器疾患を有する 97 症例を対象に SMRP 測定を行った。中皮腫症例で高値を示し、アスベスト曝露やプラークのみでは上昇は見られなかった。一方、石綿非関連良性疾病において 12/58 例で cut off 値 (1.5 nM) を超える症例を認めた。